

平成30年度第2回 芦屋市立美術博物館協議会 会議録

日 時	平成31年2月5日（火） 10:00～12:15
場 所	芦屋市立美術博物館 講義室
出 席 者	<p>会 長 藪田 貫 副会長 岡 泰正 委 員 飯尾 由貴子 委 員 中島 幸夫 委 員 若林 敬子 委 員 山本 理恵 委 員 安部 太一郎 委 員 星野 剛一</p> <p>（芦屋市立美術博物館指定管理者） 副館長 石井 茂（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 清水 和彦（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 大上 直美（株式会社小学館集英社プロダクション） 株式会社小学館集英社プロダクション 浅野 智恵 グローバルコミュニティ株式会社 青木 大介</p> <p>（事務局） 教育長 福岡 憲助 社会教育部長 田中 徹 生涯学習課長 茶嶋 奈美 生涯学習課文化財係長 竹村 忠洋 生涯学習課 森位 篤行 生涯学習課 石田 直也</p>
事 務 局	生涯学習課
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

- (1) 教育長あいさつ
- (2) 委嘱状及び任命状の交付
- (3) 会長及び副会長の選出

- (4) 議題

- 1) 芦屋市立美術博物館運営基本方針について
- 2) 展示状況について
- 3) 平成30年度事業報告について
- 4) 平成31年度事業計画（概要）について
- 5) その他

2 提出資料

- 資料1 芦屋市立美術博物館運営基本方針
- 資料2 第2回芦屋市立美術博物館協議会「事業報告書」
- 資料3 芦屋市立美術博物館 平成30年度 展覧会動員実績
- 資料4 平成30年度入館者数 内訳 芦屋市立美術博物館
- 資料5 2019年度 展覧会予定

3 委嘱状及び任命状の交付

平成30年12月16日から平成32年12月15日までの2年間の任期とする。

4 会長・副会長の選出

芦屋市立美術博物館条例施行規則第10条に基づく互選により、藪田委員を会長に、岡委員を副会長に選出。

5 審議内容

(藪田会長)

それでは、平成30年度第1回美術博物館協議会を開催します。

議題(1)の「芦屋市立美術博物館運営基本方針」について、事務局より説明をお願いします。

(事務局：竹村係長)

～資料1に基づき説明～

(藪田会長)

次に、議題(2)の「展示状況」について、事務局より説明をお願いします。

(事務局：竹村係長)

美術博物館では、企画展「星のような—のこすこと／のこされるもの—」を昨年12月8日から2月11日まで開催していますが、ただ今から運営基本方針の内容を踏まえて、展示をご覧いただき、後ほど、展示内容や方法について協議いただきたく思います。

説明は、清水学芸員をお願いします。

……………<展示室へ移動，企画展の説明>……………

(藪田会長)

只今、展示をご覧いただきましたが、運営基本方針の内容を踏まえて、展示内容や方法についてご意見、ご質問などいただきたく思います。

(安部委員)

今回この展示に関しては、具象あり抽象あり写真もあって、なおかつ作家の方々が使用されたカメラもあり、とても内容的にいいなと思います。展覧会の内容としても大変興味深くて面白かったと思いました。ただ、子どもたちが観に来るということで、歴史展示室ではふりがながつい

ています。この展覧会では、ふりがながついていないということがありましたので、どちらにもふりがなを付けてあげてほしいなと思います。子どもたちは習っている漢字とか習っていない漢字があります。ローマ字も読めないということもありますので、説明が難しいような内容であれば、子ども向けに分かりやすく、要所要所で分かりやすく子ども向けの解説、それからふりがなを付けてあげていただいてもいいかなというふうに思います。それから、子ども向けのワークシートは作られていますか。

(清水学芸員)

今回は作成しておりません。

(安部委員)

ワークシートがあったら、子どもたちはそれに書き込むことで頭に入っていき、なおかつ作品を見ようとします。ゲーム方式で作品を見る、例えば、「この絵の中にこういう生き物が隠れているよ。」とかを、子供たちに遊び心を与えるようなワークシートを作っていたら、子どもたちは作品を見ようとして、なおかつ、作品から読み取ろうとします。子どもは子どもなりの観点で、作品にも素直に付き合ってみようとするので、すごく私たちも子供たちから意見を聞いてみたら、「なるほど、子どもはこういう見方をするんだな。」ということもあったりするので、是非ワークシートは作っていただけたらなと思いました。

あとは、子どもたちの目線のことでは、大きい作品は仕方ないと思いますが、小さいものに関しては、少し目線を下げて観ることができるような展示ができれば面白いと思います。子どもたちが見たいと思う展覧会というのは、家の人と一緒に必ず行きますので、そこでどんどん広がっていくと思います。

私は、山手小学校に勤務させていただいているんですが、いろいろな美術館に連絡を取らせていただいて、チラシやポスターも送ってもらいます。それを図工室に置いていたら、「先生、これ持ち帰っていい？」と、持って帰っていきます。それで、全員ではないんですが、冬休みや夏休み中に観に行くと、あとで感想を聞かせてくれたりとかよくするので、発信力というかポスターとかも子どもの目に止まるようなデザインも大切だと思いますし、子どもが来たいと思うような展覧会のアピールというのにも必要なと思います。

(藪田会長)

ありがとうございました。この機会ですので一言ずつお願いします。

(星野委員)

今日、企画展の展示を見ると絵と併せて解説があるので、作家の個人的な歴史、ヒストリーが分かる構成で、美術博物館の美術と歴史の共存した形の展示となっており、面白いなと思いました。私自身は、この美術博物館でアートマーケット「つくる場」という催し会で、「考古学のワクワク体験」に出させてもらい、その時に美術博物館を見たのがきっかけとなって、美術博物館にはまり、ここに座る事となりました。所謂、美術館では「考古学ワクワク体験」という切り口のワークショップは開催しないと思います。これも美術館と歴史がうまくコラボした成果のワークショップだと思います。

(藪田会長)

山本さん、どうぞお願いします。

(山本委員)

今、実際に展示を観させていただいて、教科書で見るだけでなく、実際に大人が観てもすごく

面白いと思いましたので、そういう機会を子どもたちに与えていただくという事はすごく大切だなと思いました。富田碎花展に子どもと一緒にらせていただいたのですが、やはり少し漢字が難しく、でもそれを子どもなりに一生懸命読み取って、どういう意味かなと言いながら観させていただいて、すごく楽しかったのですが、やはり子ども向けのワークシートがあったら、さらに、楽しめるかなと感じたのと、あと、ワークシートの中に、例えば、「自分だったら、どんな風に表現したいですか?」という質問とともに、絵を描けるスペースがあったりとか、そういうことでも面白いかと話をしたり、例えば、学校で配布されているポスター、チラシそういうのを見て、あまり興味がない子どもは、「どんな風にしたら見るだろうね。」と話す中で、例えば、4コマ漫画とかを入れたりとか、なんか子ども発想の意見も聞けたので、そういう子どもの意見というのも楽しいなと思いましたので、実際に子どもに意見を聞くというのも面白いんじゃないかと思いました。

(若林委員)

先ほどの安部委員のご意見に関連してルビというのは、この会議でも提案させていただき、それを具体的に実践してくださって、たいへん嬉しかったです。この美術博物館協議会で協議したことが活かされないという意味がないという事で本当にありがとうございます。今回の展示ですが、たいへんご努力を感じました。初めて見たものがたくさんあったので、今後、もっとたくさん展示されていかれたら良いと思います。谷崎潤一郎記念館から借りてきた資料が一か所ありましたけども、そこに富田碎花の資料も一緒に展示するとか、関連付けて展示をするとか、先ほど山本委員もおっしゃいましたように、富田碎花の短歌のそばの口語訳とか、現代語訳をつけたりとか、子どもたちに親しみが持てるような展示の仕方を考えていただきたい。先ほどの美術博物館の展示ですが、清水学芸員が教科書を実際にご覧になって、そこから子どもたちがこういう所の切り口だったら、興味を持つだろうなという風な、一歩踏み込んだ思考で展示をしていただいたのが、たいへん有難かったと思いました。

(中島委員)

今、お話の通り、良い着想で作品を展示されているのは、良い事だなと思いました。今回初めて協議会に出席させていただいて、せっかく良い展示をしているのに、来場していただくための方策をどのようにしていらっしゃるのか、出来れば、もう少し多くの人に来てもらった方が良いなというのが、率直な意見でして、まだ芦屋川カレッジ学友会にも何人か会員がいますので、ただパンフレットを配るだけじゃなくて、こういう事があるという一歩加えた感じでの普及をしたいなという感じです。来場者の喚起策を教えてくださいと思います。

(飯尾委員)

具体美術協会から小出檜重、ハナヤ勘兵衛などのまさにこちらのエッセンスが凝縮されているような展示で、非常に興味深く拝見しました。それで学芸員の方も非常によく調べられていらっしゃるって、書簡ですとか、丹念に調査されていて、その辺りの展示も非常に勉強になりました。もちろん作品自体は素晴らしいですが、文字資料や映像資料といったドキュメントが興味深く、作品の理解を深めるための展示も良かったので、感心しました。さらに、PRをされていけば、もっとこの芦屋市の具体美術の資源というものが、知られるのではないかなと思います。最近では大学生などもあまり美術館に行かないというような状況もありまして、こういう具体の資料ですとか、1930年代の阪神間モダニズムの貴重な資料などもこちらはお持ちなので、そういった文化という物をもっとたくさんの方に知っていただくためにもPRという所を工夫していかれる所

を、一緒に考えていきたいと思いました。

(藪田会長)

ありがとうございました。私も一つだけ。美術博物館もそうですが、2階建ての建物は動線がどうなっているか、初めて来た人はわからない。その時に例えば、チラシを見て、この小出檜重の自画像が観たいと思って来た人が、どこへ行ったらまずそこへ行けるのかという、時間がたくさんあって、観ていてみつかるというタイプと、まずそこへ行きたいというタイプがあるので、見どころみたいな物が、どのフロアのどこにあるかというのを書いておかれるということにすれば、目的を持って来た人には、動きやすいと思います。やっぱり1階から2階に上がって、しかも円形で動いて行くわけですから、どこの先に何があるのか見えないので、やはり動線の部分もう少し分かるものがあったても良いんじゃないかなと思いました。これだけ良い作品が並んでいるんですけど、時間がたっぷりある人ばかりでなく、「良い作品だけ観て帰りたい。」そういうものもあって良いのかなと思いました。

清水学芸員から、今、委員の方々からご質問が出たことで、アンサーはありますか。

(清水学芸員)

大変評価もいただいて、ありがとうございます。委員の皆さまおっしゃったように、まだまだ不十分な所も多々ありますので、次回以降の展覧会、来年度になりますけれども、ご意見を反映する形で工夫していきたいと思っています。ありがとうございました。

(藪田会長)

それでは、議題3「平成30年度事業報告」についてということで、事務局から報告をお願いします。

(竹村係長)

事業報告につきましては、指定管理者の方から報告をお願いします。

(石井副館長)

最初に、ここの美術館を運営させていただいている組織ですが、大きくは3つの部署に分かれています。経理、総務、広報関係、それから企画は学芸員です。指定管理料で展覧会の費用を出していますが、やはり館蔵品だけではなかなか特徴も出ませんので、外部から持ってくる必要もごございます。目標の動員数も掲げて、予算を学芸員と相談し色々工夫して行っています。開催経費負担金としては他の施設から持って来ると、これをお支払しないといけません。また、設営費用として、来館者のために業者に頼まないといけません。それから広報物としては、ポスター、チラシ、チケットの印刷費用です。広報関係は、関係する方々にご案内をします。併せて新聞社ですとか、テレビ局とかの郵送料です。市内掲示板にも全部貼るために、業者をお願いしています。それから、駅へ広告を出しています。あとは、賃金として、受付の人件費や交通費です。また、講演会費用として先生方をお願いしています。というような形で展覧会の予算を組んでいます。

(清水学芸員)

それでは、今年度実施してまいりました展覧会についてご説明いたします。まず4月には万葉のセゾン展を、奈良県立文化館から日本画のコレクションをお借りして展示をいたしました。たいへん大型の作品が多かったので、ホールも使って展示をいたしました。併せて、万葉文化館の方からグッズも持ってまいりまして、臨時のショップも開設しております。

続きましては、7月からは「チャペック兄弟と子どもの世界」という展覧会を開催いたしました。

た。これについては、撮影可能スポットという事で、自由に写真を撮っていただけるコーナーを設けました。チャベックさんに手紙を書こうというという事で、メッセージを書いてもらうというコーナーも設けて自由に書いてもらいました。

続きまして、富田碎花展ですが、これも文学作品という事なので、なかなかビジュアル的に何を展示するのか難しかったのですが、まず、最初に岡本一平が書いた富田碎花の肖像画を展示いたしました。富田碎花は、甲子園、夏の高校野球がたいへん関連が深いという事で、行進曲の作詞の部分の展示をし、朝日新聞社にご協力をいただき、第1回大会からの写真パネルの資料も展示いたしました。併せまして、これらの高校野球に関連する資料として、先ほど見ていただいた行進曲が、78年ぶりに歌詞付きで唄われたという鳥取県の大会のビデオを放映いたしました。

引き続きまして、先ほど観ていただいたコレクション展です。ハナヤ勘兵衛のご子孫の桑田さんに解説をいただきました。

それでは、歴史の方の展示ですが、まず年度の初めに、芦屋の歴史と文化財という所で、今年度は、特別に阪神大水害から80年という事で、近代の展示のコーナーに水害の関連資料を展示いたしました。併せて、当時の貴重なフィルムを会場で上映をいたしました。考古学関連の資料として、会下山遺跡の出土品、埴輪、土器、石器なども展示をいたしました。併せまして、市の指定文化財であります青銅製漢式三翼鏃も展示をいたしまして、芦屋市の指定文化財であるという旨の解説をしています。この時に、芦屋川水車絵図という江戸時代の芦屋川で行われておりました水車産業の絵図を展示いたしました。このあと、昔の暮らし展を開催しており、先ほど会場でご説明した通り、タライであるとか、氷冷蔵庫の説明もいたしました。また、雛人形を時期的に早いんですけど、芦屋のお宅から寄贈されました大変貴重なものなので、毎年展示をいたしております。

続きまして、講演会講座、ワークショップなどです。10月に行いました松谷武判の講演会ですが、たいへん多くの方にご来場をいただきました。伊勢幼稚園とのコラボレーションで「イセ☆コレ」という幼稚園児に自分で作った服とか、バックとかを発表してもらうというイベントを前庭の方で行いました。アートマーケット「つくる場」、これが5月と12月の年2回開催ですが、併せて8,000人の来場がある最大のイベントでして、今年度もたいへん多くの方に来場いただきました。8月には美博夏まつりとして、子ども向けのイベントとして、夕方4時から7時まで、スーパーボールすくい、輪投げや射的などのイベントを開催いたしました。歴史は宝だという事で、歴史の中でも特に芦屋の関連で、「ぬえ」という架空の生き物がどういう風に歴史上表現されてきたのかという事を、外部の主催で、12月に能体験を行いました。次は、芦屋講談として、旭堂南陵先生に来ていただいて、やはり「ぬえ」についての講談をお願いいたしました。最後ですが、博物館実習という事で、毎年大学生を受け入れております。今年度は12名で、中央大学からも来てもらいました。学生たちには非常に実践的な体験をしてもらうため、期間中に子ども向けの勾玉を作ろうというワークショップをしました。また、グループに分かれた学生たちが、自分たちで、この美術博物館で展示を企画したら、どういうのが出来るかなというのを展示企画発表という形で、グループごとに自分たちで考えた展覧会を発表してもらいました。

最後ですが、トライやる・ウィークとして、11月に、中学生たちが1週間程度職業体験で来てもらいました。チラシを作ったり、小出檜重のアトリエを掃除してもらい、非常に積極的に参加していただきました。報告は以上でございます。

(藪田会長)

続けて平成 31 年度の次の議題にも進めさせていただいて、その後にもまとめてご意見などいただければと思います。

(石井副館長)

資料 3 及び資料 4 に基づき説明。

(清水学芸員)

手元の資料に 2019 年度展覧会予定という資料 5 がございますので、ご覧いただきたいと思えます。

まず、芦屋市展も含めまして、美術部門、歴史部門合同の展覧会が 4 点、それから、「芦屋市造形教育展」、「芦屋の歴史と文化財・昔の暮らし展」、これは引き続き開催をする予定でございます。

まず、4 月から 6 月にかけて、「描かれた神戸・大阪—阪神名勝図絵と青山政吉」という展覧会でございます。これは、阪神名勝図絵というのは、大正時代に描かれました阪神間を描いた版画でございます。青山政吉が、つい平成の時代まで活躍しておりました水彩画を中心とした作家でございます。共に阪神間の風景というのをテーマに多くの作品を描いておりますので、これも歴史部門とそれから美術部門の融合という認識として開催をいたします。阪神名勝図絵というのは、歴史資料という位置付けにしておりますので、同じ風景をどのように描き分けているのかという事でお楽しみいただきたいと思っております。期間中には講演会、コンサートも予定しております。それから夏には、子ども向けという事で、コレクション展として、「こどもとおとな—これなにに見える?—」という展覧会を予定しております。これは、先ほども委員の皆さまからご意見を頂戴しましたとおり、子どもにも分かりやすい展覧会をとという事で、具体の作品を中心とした当館の収蔵資料というのは、どうしても抽象的な作品が多くございますので、子どもと大人では見方が違ってくる。これも一つの面白い所でございます。なので、一つの作品を子どもの目線、大人の目線、それぞれどういう風に見えるかなというのをテーマに開催を予定しております。続いて第 65 回芦屋市展ですが、これは 2 年に 1 回の開催でございます。来年度は 10 月からの展示の予定です。これについては、従来、部門としては、写真部門と平面部門 2 部門を来年度も継承する予定でございます。毎年、たいへん多くの応募がございますので、これについても審査等を審査委員の先生などの選定も含めても進めてまいります。それから、「art trip」 vol.3 「number」というタイトルですけど、「art trip」という展覧会、今回がその第 3 弾という事になります。12 月からの展覧会ですが、これは、今やっている展覧会と同様、非常に内容の濃い物になるかなと思っております。以上です。

(藪田会長)

それでは、ご説明いただきました 30 年度事業報告や動員実績等、入館者内訳というのを見させていただきながら、今年度の活動について意見を交わしていただけたらと思います。私の印象ではこの基本方針が出来た事も踏まえて、基本方針に沿って 30 年度は実施されたと理解しております。その点のご意見も併せていただけたらと思います。

(若林委員)

拝見いたしました。先ほどの「星のような」コレクション展というのは、たいへん素晴らしかったなという風に思います。実際に足を運んで目で見てみて、すごいな、素晴らしいなと思うのですが、今、次年度の事業計画を拝見しました所、内容は盛りだくさんですが、自分の目で確かめて拝見しないと難しそうで、広報をずいぶん頑張られないと大変かなという風に思いました。

先ほどポスターを貼る掲示の所で業者に発注されていると伺いましたが、それなりに費用が発生すると思います。手前味噌ですが、これをコミスク連絡協議会の方で、お手伝い出来るかなという風に思います。それから、やはり防潮堤に描かれている絵が、相変わらずで、もう借景の一部になっているのにあの感じが長年続いています。本当に具体的に直す事が出来ないのかなという風に思います。この貴重な借景をもう少し有効利用出来ないのかなというのを、いつも感じるところです。それから博物関係になるかと思いますが、芦屋出身の人物を取り上げてみても面白いんじゃないかなと思いました。例えば、白洲次郎とか、かなりメジャーで知れ渡っている方なので、彼の一生を通じて提示してきた事のような物も取り上げられたり、それから、今、大相撲で活躍されている貴景勝関という人物も取り上げてみたら、結構面白い展示になるのではないかなという風に思います。

(安部委員)

平成30年度のチャペック展の時に、本市の美術博物館と西宮の大谷記念美術館との連携で、バスに乗って展覧会を観に行こうという風な事や、伊丹の美術館との3館連携で、三つの美術館を回ろうという企画をされていたと思いますが、この美術館に行ったら、こういう風な作品も観ることができるんだな、こういう企画されているんだな、こういう建物なんだなと、足を運んでもらうという事を考えたら、他の美術館との連携というのも大切かなと思います。先ほどからPRの話も出ていますが、例えば予算の事とかもあると思うんですけど、駅だけじゃなくて、電車の中とか、人が目にする所というのは、とても効果があると思いますので、PRをする上でのその場所とかを色々試されても良いかなという風に思います。

(星野委員)

確認ですが、年間で展示に使えるお金というのは1400万円ぐらいで、実質は1600万ぐらいのお金が掛かっているとの事なのですか？

(石井副館長)

基本的にはそうですけれど、たくさんの方に色々な内容で来ていただきたいというのがありますので、だいたい年1回ぐらいは、外部から作品を持ってくると、どうしても費用がかかりますので、基本、入館料を変更したりにするのと、やはり動員が見込まれるという事がありますから、それだけ売り上げをたてて帳尻を合わせるという方法です。今回残念ながら、推移を見ていただくと、昨年度、動員数が悪いのですが、それは残念ながら我々の思惑と、動員数が結びつかなかったという反省をしております。

(星野委員)

差額が200万円という事だったら、入館料を500円としても、入館者を現状よりも4,000人ぐらい増やさなければいけない計算になりますね。一つはやっぱり、ここ自身に魅力がある事と、そして入館のきっかけ作りが大切だと思います。私の場合は、生涯学習課の配慮で、文化財ボランティアとして、「つくる場」に参加したのが大きなきっかけとなりました。マニア層を集めるのとは一方では、今度は裾野を広げるきっかけ作りとなる事業も、何かあったらと思いました。委員の方々から見られた時に、一般の美術館、博物館と比較して、芦屋の美術博物館の中は良い点もあるし、悪い点もあると思います。どのようなお考えなのか、率直なご意見をお聞かせいただけたらなと思います。

(藪田会長)

ありがとうございました。まず、山本委員、昨年度の表を見られて、どうぞ。

(山本委員)

先ほどと少し重複してしまいますが、やはり子ども向けの展覧会、大人向けの展覧会というのがあると思いますが、パッと区切ってしまうのではなくて、結構、足を運ぶと興味を示す。どうしても子どもの話になってしまいますが、子どもは興味を示すので、出来ればどのような展覧会においても、ちょっと分かりやすい解説をちょっと横に付けていただいたりすると、足を運んでみようかなという気になるのではないのかなという風に感じました。

(藪田会長)

ありがとうございました。中島委員どうぞ。

(中島委員)

先ほどもお話しした、やっぱりどなたが来るのかなと考えて、どういう風にして人に来ていただくかなというのも気になるんですが。私も、常日頃思っている事ですけども、来場者というのは、どういう企画があってもいらっしゃる人と、感心を持たせて来るような気持ちをさせる人、二つの種類があると思います。こういうパンフレットだったら、興味のある人だったら、あそこに行ってみようかなとなります。興味のない人は、これはわからないからいいやとなってしまう。これではもったいないという気がします。そういう興味のない人にも来てもらうためにはどうしたら良いか、せっかくいい作品を今日も見せていただいて、いい企画を作っていらいっしゃるので、是非みんな市民に来てもらい、身近な芦屋人がこんなにいるんだなど、すごい興味のある事だと思いますので、是非そういうところにもう少し興味のない人にも来てもらえる喚起策を考えてもらったらと思います。

(藪田会長)

ありがとうございました。飯尾さん、専門家の立場から。

(飯尾委員)

美術が好きの方はいつでも来てくださるんですけど、それ以外の観覧者の裾野をどのように広げるかというのは、私どもにとっても大きな課題です。例えば、展覧会タイトルをわかりやすくするとか、最近では SNS ですとか、フェイスブック、インスタグラムとかそういうイメージを拡散する事によって、興味を持ってもらえるような工夫を私どもも含めてやっていかないといけないのかなと思いました。一つ教えていただきたいのですが、「事業報告書」の1ページ一番下の「トークフリーデー」というのは、おしゃべりしながら鑑賞できるというのは、最近、美術館では、しゃべったらダメという風に思っておられる方がいらっしゃるみたいで、アンケートによっては、私語がうるさいという苦情が時々あったりするんですが、こちらは敢えてこういう日を設けられたという理由があったのでしょうか。

(清水学芸員)

これは最初にチャペック展の時に始めたのですが。やはりお子さんを連れていらっしゃる方が多いという事で、話したらダメよというのが、なかなか難しいという事もありまして、それを逆手にとって、じゃあ自由にしゃべっても良いという日を設けようという事で、週1日のペースで、もちろんあまり大声でというのは、もちろんご遠慮いただいておりますが、普通の会話ぐらいであれば、今日はしゃべって良いですから。それは、ご了解いただいきたいときちんと掲示をいたしまして、「フリートークデーです。」という事で、中にはおしゃべりが気になるという方ももちろんいらっしゃるので、そこは、告知をした上で実施をしております。それで好評という事もありますので、引き続き、現在の展覧会でも行ってございまして、もちろんお一人の方もたいへん

多いのですが、二人、三人でお越しの方も多いので、やはり、作品を会話しながら観られるというそういう一日もあっても良いかなと、そういう考え方で実施をしております。

(石井副館長)

実際に目に見えて変わりました。それは観られた方の中で、やはり小さいお子さんを抱えて、赤ちゃんの場合、なかなか外に出られない方も来てくださる。通常展覧会の中では、アンケートに、時々、誰々さんがうるさいとかが書かれるのですが、フリートークデーの日はまったく書かれていませんので、そういう意味でも成功しているのかなと感じております。

(飯尾委員)

参考になりました。ありがとうございました。

(若林委員)

とても良い試みだと思います。いかに、この美術博物館に一人でも多くの方に足を運んでいただくのが最重要課題だと思うんですね。2月に開催されます芦屋市の造形教育展の時に、段ボールを使ってのアート作品という物を、子どもたちもどの小学校もたぶん手がけられたと思うんですね。それをアートに昇華させていらっしゃるという方の新聞記事を目にしましたので、造形教育展の時に、一部場所をお借りして、こういう方の作品も一緒に展示してみてもどうかと思うんですね。そうしたら、造形教育展は、本当に子どもさんも保護者もたくさん足を運ばれる展示会ですが、来られた方がこんなすごい物も一緒に展示してあったという事を口コミで広げていただくと、じゃあ見に行こうかという事に繋がるんじゃないかと思います。ですから、そのような事もされてみてはいかがでしょうかと思いました。それと、そこでちょっとした作品を作ってもらうとか、そんな事も、ワークショップもしてみたらどうかと思いました。

(藪田会長)

ありがとうございました。岡委員に来ていただきましたので、委員に関われる前からこの博物館をご存じだと思いますので、何か。

(岡副会長)

私は、小磯良平記念美術館の館長4年務めておりまして、ゆかり美術館の館長もしております。それで一番思ったのは、やはり六甲アイランドに位置する美術館の場所が、来にくい所で、一般の方々来られない。それに企画的にも新聞社と組むことが多く、今の新聞社自身が神戸市から西の方が強く、広報しても六甲アイランドに来ていただくまでに費用負担が多くなります。

そこで、一番は、東の新聞社にも投資しないといけないという戦略的にはっきりとした方針が必要であるという事です。また、いろいろな事を考えて、ヨーロッパの展覧会のユニマットのコレクションとか、ヨーロッパの絵画のコレクション展をしようと思いたちました。そうしても、やはりテレビ局の広報がなければ、ものすごく広報宣伝は難しい。本当に草の根的にやってもなかなか六甲アイランドに人を呼ぶのは難しい。もう一つは棲み分けで考えたのが、ゆかり美術館は、神戸のゆかりという一つの冠はあるけれども、展覧会として特化したのは、アニメーションです。棲み分けていくという考え方で、はっきり分けて考える。それで、学芸員もこれは非常に重要なテーマであるという事を認識するという事が非常に重要だと思っております。それだけではなくて、もちろんそれとブレンドして、現在行っている展覧会だと一日40人とか60人とかいうことですが、有料入館者は20名とかです。それはそれで、研究発表としてやって、その次に大きな展覧会をどんと入れて、その収支をはかるという事を考えざるを得ないのです。100人を1,000人にすることは、なかなか難しく、100人を500人にすることは出来るんです。そうする

と大きな展覧会があれば、1万人とか、2万人とかいう事がありますので、タイアップする新聞社と一緒にやる事を考えました。それで、小磯美術館の場合は、企業のコレクション展をやって、そしてプラス、アールデコの展覧会をやるとかして、そして小磯良平作品と合わせて観てもらおうというトータルな考え方で進めてまいりました。一つ私がやったことは、ネーミングライツです。ですから、六甲ライナーに小磯良平美術館前という名前を連呼してもらっています。実施にこぎつけるまで何年もかかりました。それと、もう一つは、小磯良平美術館にも協議会がありますので、委員に大学生に来てもらい、若い人の中に入れてもらい、一緒に考えてくださいという風な事で、大学との連携をしました。また、女子学生の方を推薦していただいて、我々と一緒に委員会を進める事をやりました。それは、お金がかかる訳ではなくて、その大学にSNSで発信してもらって、若い人たちの意見を聞くことは、面白いとか、これが良いとかというのを一緒に考えてもらおうという事ですね。それは、自分が館長になってやれた前向きな事です。また、少しずつでもマンスリーコンサートという事で必ずそれはやる。それを定着させると、近隣の人が見に来られる。それから後は、私自身がお話をするという事です。これは、講座で必ずお話しする。この美術館がある事が大事だという風に思っただけならばと思ひまして、講演会をするという事でございます。それは、この芦屋の場合は拝見しておりまして、吉原治良というのは、非常に重要な事で、やはり具体美術は、初めほんとにわからないというような事を初期の頃はぜひぶん切り捨てられていたんですけど、大阪の新しくできる美術館にしても、「県立美術館も具体は大事ですよ。」と兵庫県知事自身が言っているというような事で、わからないとかではなくて、それを発祥の地として、元祖として、やっぱり作るということで、精神を受け継ぐ訳で、つまり、人のやっていない事やろうという事を芦屋でやる訳ですから、そういう意気込みを現代美術の一つのミュージアムティーチャーみたいなスターの人がいたら、もっと面白い事がこの場所を借りてやれるんじゃないかと。そうすると、小出檜重を含めて歴代優れた洋画家がいた訳ですから、その具象と具体の現代美術と二人をやっぱり柱にして、その元祖であるということ強く標榜する二大ティーチャーが頑張る企画をする。現代美術のワークショップなりをずっとやられている訳ですけども、もう少し具体という物を吉原治良の考えをみんなで継承していく事ですね。そういう風な事で大学と連携してやっていけば良いかなと思います。小磯美術館も実際本当に人が来ないので、幼稚園から、幼稚園児から説明をする。そのためのそのツールをいっぱい作ってやっています。それは、本当に綺麗事ではなくて、本当に大変です。子どもが走り回りますし、苦情をいう人もいます。それからシルバーカレッジのように年配の人に模写をさせる。小磯作品の色鉛筆で模写をさせるとか。それから、アトリエで絵画教室の先生に来てもらってやるとか。やはり実技をやらせないといけない。少しずつそういうようなことを当たり前の事として、自らがモチベーションを持ってやるというのが、大事だという事をずっといってきておりました。成功しているかどうかは色々な意見があると思うんですけど、とにかく変わろう、変わって人を呼ぼうという、そのモチベーションが全体に伝わるように、そして棲み分けて明確に戦略を立てるという事を言えるかどうかという事になります。ご参考になるかどうかわかりませんが、私どもとしては、芦屋市立美術博物館がこれだけの施設を持たれていますが、やはり足の便が悪いんですね。それは、うまく戦略的に考えて、わざわざでも来ようとか、そういう事の場合としてここを使っただけならば、我々にとっては、吉原治良、小出檜重は神様みたいな気持ちでありますので、やはり現代美術に光を当てないといけないなと思います。

(藪田会長)

ありがとうございました。終わりにあたりまして、市当局が、平成 30 年度の成果をどう見ておられるのかご発言いただけますか。

(茶嶋課長)

指定管理の方もすごく頑張って色々企画を立てて考えてやってくれていると思っはいますが、外部から作品を持って来ると人は来ていただけるのですが、コレクション展とか収蔵品を展示しますと来場者が少なくなっています。そこは、芦屋にある美術館博物館なので、より芦屋の人に来てほしいですし、館内にある収蔵品を使ってやる事が一番本当は大事なんじゃないかと思っていますので、もっと PR の仕方と、飯尾委員がおっしゃったように、タイトルは、学芸員の方のお考えがあっはされているので、メインタイトルでなくてもサブタイトルで分かるような表現であるとか、美術博物館に行ってみようと思えるようなキャッチコピーであるとかを入れたチラシを作ってもらえたらと思っています。本当に今回の「星のような」のコレクション展は、見ごたえのあるすごく良い物にもかかわらず、今回の展覧会の動員実績が少なく、すごくもったいなく思います。昨年度に美術品収集委員会で収受した作品も新しく展示もしているの、やはりそういったものを PR していく力が少し弱いのかという風に思っています。市としても、民間の力を借りて活性化するというのが、指定管理者制度を導入した一番の理由ですので、市職員が考えるよりは、また違った発想があると思いますので、そこをもっと考えてもらえたらなと思っています。

(藪田会長)

ありがとうございました。これで、本平成 30 年度第 2 回美術博物館協議会を終了いたします。